

4. 考察

宗像市に生息する両生類・爬虫類を表 7-6 に示す（分類群名と学名は疋田、2006；松井、2006；太田・高橋、2006；内田・他、2002 による）。福岡県には 15 種の両生類、16 種の爬虫類が分布しているが（福岡県環境部、2001）、このうちオオサンショウウオは過去 10 年に目撃情報はなく、絶滅とみなして差し支えない。残り 14 種の両生類のうち、ヤマアカガエルとカジカガエルは宗像市に分布せず、トノサマガエルが絶滅したことはほぼ確実であるから、結局宗像市には 11 種が分布していることになる。これらの種は前回の調査と比べてとくに減少したようには見えなかった。

県内に分布する爬虫類 16 種のうち、宗像市で確実な記録がないのはニホンスッポン、タカチホヘビ、ジムグリの 3 種である。このうち、ジムグリが生息する可能性はかなり

高いので、他の2種を省いた14種が宗像市に生息する爬虫類ということになるが、表6では産卵のために回遊してくる可能性の高いアカウミガメを除外した13種を挙げている。

平地に分布する両生類はニホンアマガエル、ヌマガエル、ウシガエルで、この状況は県内どこでも変わらない(倉本、2002)。以前には水田域の普通種であったアカハライモリ、トノサマガエル、ツチガエルは平地からほとんど姿を消してしまった。その原因としてよく指摘されるのは除草剤や殺虫剤の散布で、これによる水質の悪化がとくに水中生活をする幼生に影響を与えたとみなされる。しかし、水田でオタマジャクシやカエルが多数死亡している状況を私は目撃したことがないし、報道された例も知らない。したがって、上田(1994)が指摘した水田域の水環境の変化がもっとも大きな原因と思われる。つまり、田植えの時期にしか水田に水が供給されず、水路の水も稲作の期間しか流れない。出穂期に行われていた水田の中干しもかなりひんぱんに行われるようになり、幼生期間の長いトノサマガエルや幼生で越冬するツチガエルにとって致命的である。水路もコンクリート製となって泥や水草に乏しくなり、餌動物も少なく、隠れる場所も少なくなった。このような状況が続いた結果として、水田域の両生類は衰退したのであろう。最近では宗像市内にサギ類が多く見られるようになり、これが餌としてカエルを捕食するのがカエル減少の一因であるという見方もある。

一方、宗像市の山地における両生類の分布に関しては、かなり顕著な特殊性が見られる。宗像市の山地を便宜的に東部山地(戸田山から城山山系)、南部山地(新立山から磯辺山)、西部山地(名見山山系)に大別すると、ニホンヒキガエル、ニホンアカガエルはこれら3山地にほぼ共通に分布している。一般に産卵環境の類似するニホンアカガエルとカスミサンショウウオの分布域は重複するものであるが、南部山地にはニホンアカガエルのみが生息し、カスミサンショウウオは見つかっていない。逆に大島ではカスミサンショウウオがいてニホンアカガエルはいないという状況で、これらはむしろ異例である。

同様に、やはり産卵環境の類似性からタゴガエルとブチサンショウウオの分布域は重複するのが普通であるが、宗像市ではタゴガエルは南部山地、ブチサンショウウオは東部山地にのみ見られる。今後精査すれば南部山地にブチサンショウウオが発見される可能性はあるが、東部山地にタゴガエルがいる可能性はほとんどない。

生息と産卵の場所がほぼ合致するのはアカハライモリ、ウシガエル、ヌマガエルのみで、他の種では大きく異なっている。とくに重要なのは産卵場所である。日本内地の両生類はすべて水中または水辺に産卵し、幼生は水中で生活するから、産卵期にそれぞれの種の産卵に適した水域がなければならない。もっとも安定した水域は溜池であるが、溜池を産卵場所とするのはニホンヒキガエルとウシガエルのみである。ただし、溜池の奥、水の流入部が浅くなっていたり、湿地状になっているところはカスミサンショウウオ、ニホンアカガエル、シュレーゲルアオガエルなどの産卵場所として利用されること

がある。しかし、これら3種の典型的な産卵場所は山間部の水田周囲の溝や小さく浅い池で、日中は日がさす明るい場所を好む。しかし、このような場所が最近是非常に少なくなっている。

ニホンアカガエルが産卵する山際の水田域の溝や水溜りは、以前はごく普通にみられたものである。しかし、このような水田域や湿地・湿田の排水がよくなり、一時的に水が溜まっても短期間に水が引いていく。原則としてこのような不安定な水域に両生類は産卵しないものであるが、水田に残るトラクタのわだちの跡に溜まった水や水田中の小さくぼみに溜まった水にニホンアカガエルの卵塊を見ることがある。水がしだいに消滅するにつれ、オタマジヤクシが密集し、やがて乾燥して全滅する例が、実際に観察された。また、山際の水田ほど減反の対象となりやすく、全体的に乾燥化が進んでいる。これはニホンアカガエル、シュレーゲルアオガエルなどに大きな影響を与えると考えられる。稲作をしていない山間部の水田域にも常時水の溜まった溝のある箇所がわずかながらあり、そこにはカスミサンショウウオやニホンアカガエルが産卵し、アカハライモリが生息しているところもあった。

産卵を終えたカスミサンショウウオ、ブチサンショウウオ、ニホンアカガエル、タゴガエル、シュレーゲルアオガエルは、山地や丘陵地の森林内で生活する。前回の調査と比べて森林の状況はほとんど変わっていないし、伐採が進んでいる箇所もないから、これらの両生類の生活の場はほぼ確保されていると考えられる。ブチサンショウウオとタゴガエルの産卵場所である谷の伏流水も、森林に変化のない限り、今後とも存続するであろう。また、多くのヘビ類にとっても生息状況が悪化しているとは思われない。

平地の水田域は昔に比べて大きく変化し、ここに生息する両生類は実質的にヌマガエル1種になってしまった。圃場整備は一段落し、今後は現状のまま推移していくと思われる。ヌマガエルの個体数は以前に比べて明らかに減少しているが、すべての水田域で生存が確認されているので、この状況が今後も続くであろう。水田域に接する溜池の多くにブラックバスなどの外来魚が移入されており、これがウシガエルの減少と関連している可能性はあるが、確証はない。水田域の中に温室が多く見られるが、温室にはヘビがすみつくことが多く、なかには冬眠しないヘビもいるという。

なお、江口の県立少年自然の家付近の砂浜は、アカウミガメの産卵が予想される海岸として現状保持に努めるべきである。さつき松原海岸には防潮堤が設置されているが、おそらくこれは砂浜が後退しつつあるためであろう。